

# 第19回 がん患者大集会報告集

ピアサポート活動のこれから

of the patients, by the patients, for the patients  
変えよう日本のがん医療、手をつなごう患者と家族たち

## ■目次

■プログラム	2
■ご挨拶 浜中和子（特定非営利活動法人がん患者団体支援機構 理事長）	2
■ご挨拶 武見敬三 厚生労働省大臣（代読 浜中和子理事長）	3
■ご挨拶 松本吉郎 日本医師会会長（代読 浜中和子理事長）	3
■プロフィール	4
■講演 佐々木治一郎先生（北里大学医学部新世紀医療開発センター教授）	5
■講演 坂下千瑞子先生（東京医科歯科大学 血液内科 特任助教）	6
■講演 山田陽子氏（特定非営利活動法人がん患者団体支援機構理事 事務局長）	7
■講演 古塚千紗氏（特定非営利活動法人がん患者団体支援機構 ピアサポーター）	8
■シンポジウム「ピアサポート活動のこれから」	8～18
■会場風景	18
■アピール文	19
■第19回がん患者大集会収支報告	19
■当日アンケート	20
■当日の感想（アンケート抜粋）	21～22
■閉会の挨拶 浜中和子（特定非営利活動法人がん患者団体支援機構 理事長）	22
■主催・共催・協力・後援・協賛・助成・寄附・制作協力	23～24

## ■ プログラム

日時 2023年10月29日(日) 開場:12時半 開始:13時 終了:16時半

場所 東京医科歯科大学 M&D タワー2階 鈴木章夫記念講堂(東京都文京区湯島 1-5-45)

オンライン Youtube 配信(ハイブリッド開催) メインテーマ 「ピアサポート活動のこれから」

12:30より	<b>開場</b>
13:00~13:15	開会式 浜中和子(特定非営利活動法人がん患者団体支援機構 理事長) 挨拶 武見敬三厚生労働省 大臣(代読 浜中和子理事長) 松本吉郎日本医師会 会長(代読 浜中和子理事長)
<b>第1部:講演</b>	
13:15~14:00	講演:「日本におけるピアサポートの現状」 講師:佐々木治一郎先生(北里大学医学部新世紀医療開発センター教授)
14:00~14:15	講演:「素晴らしいピアサポーター達と共に歩む」 講師:坂下千瑞子先生(東京医科歯科大学 血液内科 特任助教)
14:15~14:30	講演:「ピアサポーターの活動紹介など」 講師:山田陽子氏(特定非営利活動法人がん患者団体支援機構理事 事務局長)
14:30~14:45	講演:「AYA がんをきっかけにキャリアチェンジ」 講師:古塚千紗氏(特定非営利活動法人がん患者団体支援機構 ピアサポーター)
14:45~15:00	休憩
15:00~16:20	<b>第2部:シンポジウム:「ピアサポート活動のこれから」</b> コーディネーター:坂下千瑞子先生(東京医科歯科大学 血液内科 特任助教) シンポジスト 佐々木治一郎先生(北里大学医学部新世紀医療開発センター教授) 山田陽子氏(特定非営利活動法人がん患者団体支援機構理事 事務局長) 西巻佳子氏(武蔵野赤十字病院 乳がん看護認定看護師)
16:20~16:30	閉会式 アピール文提出

## ■ ご挨拶

浜中和子 (特定非営利活動法人がん患者団体支援機構 理事長)



皆様 こんにちは。ただいま紹介に預かりました理事長の浜中和子です。本  
日会場にご参加の皆さん、本当にありがとうございます。また全国でこのオン  
ライン配信を見ていただいている皆さんにも心より感謝申し上げます。

昨年は、コロナ対策のため完全にオンライン開催でしたが、今年は4年ぶ  
りにこの東京医科歯科大学病院でリアル開催と YOUTUBE 配信することにな  
りました。開催にあたり多数の機関からご後援を頂き、さらに企業・病院関  
係の方々からご協賛を頂きました。この場を借りて改めてお礼申し上げます。

私ども特定非営利活動法人がん患者団体支援機構では長年ピアサポー  
ター養成講座を実施しており、たくさんのピアサポーターを養成しています。こ

れまで、東京都の3か所の病院、横浜市の病院、世田谷区保健センターでピアサポート活動を実施してきました。しかし、  
この4年間コロナのため、活動の縮小や停止を余儀なくされ、十分なピアサポート活動ができず大変残念でした。がん  
患者さんが相談の場をなくし孤立化し、苦しまれたのではないかと心配しています。

そこで、今年の第19回がん患者大集会は、「ピアサポート活動のこれから」をテーマに掲げて開催いたします。

第1部では4人の方にピアサポートに関するご講演をいただきます。

- ・佐々木治一郎先生(北里大学医学部 新世紀医療開発センター教授)「日本におけるピアサポートの現状」
- ・坂下千瑞子先生(東京医科歯科大学 血液内科 特任助教)「素晴らしいピアサポーター達と共に歩む」
- ・山田陽子氏(特定非営利活動法人がん患者団体支援機構理事 事務局長)「ピアサポーターの活動紹介など」
- ・古塚千紗氏(特定非営利活動法人がん患者団体支援機構 ピアサポーター)「AYA がんをきっかけにキャリアチェンジ」

続いて第2部のシンポジウムを通して、ピアサポート活動の重要性、課題について討議し、今後さらにピアサポート活動を  
全国に広めたいと思っています。それでは皆様これから長時間になりますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

## ■ご挨拶

武見敬三 厚生労働大臣 (代読 浜中和子理事長)

「第19回がん患者大集会」の開催にあたり、一言御挨拶申し上げます。

今回で19回目となるがん患者大集会が盛大に開催されますことをお祝い申し上げますとともに、開催に御尽力された関係者の皆様に敬意を表します。

さて、我が国においては、生涯のうちに国民の約2人に1人ががんに罹患しています。昭和56年からは死因の第1位であり続け、現在もおお4人に1人ががんで亡くなっています。がんは依然として、国民の生命と健康にとって重大な問題です。このような状況を踏まえ、本年3月に閣議決定した「第4期がん対策推進基本計画」において、「がん予防」、「がん医療」及び「がんとの共生」を柱として掲げ、総合的ながん対策を進めております。

「がんとの共生」として取り組むべき施策の一つである相談支援については、がん診療連携拠点病院等とピアサポーター等との連携体制の構築や、がん患者の方がピアサポーター等からの支援を受けやすくなるような仕組みの検討などに取り組むこととしております。

本集会は、「ピアサポート活動のこれから」をテーマに、ピアサポートの現状や活動などについての理解を深めるとともに、ピアサポートの重要性を改めて認識し、その活動を全国に広めるための機会と伺っております。

厚生労働省としても、患者の方やそのご家族等が望んだ場所で、適切な医療や様々な支援を利用しながら過ごすことができるよう、今後とも、皆様と協力しつつ、国民の視点に立ったがん対策を進めてまいりたいと考えておりますので、引き続き御理解、御協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

最後になりますが、本集会の成功と本日お集まりの皆様方の御健勝をお祈り申し上げて、私の挨拶といたします。

## ■ご挨拶

松本吉郎 日本医師会会長 (代読 浜中和子理事長)

「第19回がん患者大集会」が開催されるにあたり、日本医師会を代表して一言ご挨拶を申し上げます。

今年のがん患者大集会のテーマは「ピアサポート活動のこれから」であり、重要なテーマであると認識しております。がん患者さんやご家族が安心して治療に望むためには、がんを経験した方同士が支えあう「ピアサポート」の取り組みもとても重要となります。わが国のがん対策では、ピアサポートを推進するための研修が実施されるなど、がん患者さん・経験者の方との協働を進め、ピアサポートをさらに充実するような取り組みが進められてきました。

そして、本年令和5年3月28日に、第4次となる「がん対策推進基本計画」が閣議決定されました。当計画において、全体目標として「誰一人取り残さないがん対策を推進し、全ての国民とがんの克服を目指す。」が掲げられました。

日本医師会からも、厚生労働省の「がん対策推進協議会」を筆頭に、がん医療に関して様々な検討会に医師を代表する立場で参画しています。「がんとの共生の在り方に関する検討会」や「がんの緩和ケアに係る部会」においては、がんと診断された時からの緩和ケア、相談支援・情報提供、社会連携、サバイバーシップ支援やライフステージに応じた対策が議論されています。

がん患者さんとそのご家族が抱える様々な苦痛、悩み及び負担に応え、安全かつ安心で質の高いがん医療を提供するため、がん対策の推進については、関係者がそれぞれの立場で、そして連携しながら引き続き着実な取り組みをしていかなければなりません。そして、がん診療については、かかりつけ医の役割だけでなく、地域で活躍されているピアサポーターの皆様の取り組みが非常に大きいものであると認識しています。本日は、各地域におけるピアサポートの現状、ピアサポーターの皆様の熱心な取り組みをご紹介します。

本大会が開催されますことは誠に意義深く、その成果に期待いたしますとともに、今回の講演とシンポジウムを通じてピアサポートの重要性が再認識されるとともに、その活動が全国へ普及されますよう願っております。

結びに、本集会の開催にあたり、ご尽力されました関係者各位に深く敬意を表し、本集会が有意義なものとなりますことを願いますとともに、本日ご参加の皆様方のご活躍を祈念いたしまして、挨拶とさせていただきます。

## ■プロフィール

### 講演:佐々木治一郎(ささき じいちろう)先生



(北里大学医学部新世紀医療開発センター教授)  
1991年熊本大学医学部第1内科に入局  
1994年4月～熊本大学大学院医学研究科  
(内科系) 学位取得  
1998年4月～熊本大学医学部第1内科に  
勤務(医員)

2000年7月～米国テキサス大学

M.D. Anderson Cancer Centerに留学

2003年12月～熊本大学医学部付属病院呼吸器内科

2006年11月～熊本大学医学部付属病院がん診療センター長

2009年5月～熊本大学医学部付属病院外来化学療法室(室長)

2011年4月～北里大学医学部呼吸器内科学准教授

2014年2月～北里大学医学部附属新世紀医療開発センター教授

### 講演:坂下千瑞子(さかした ちずこ)先生



(東京医科歯科大学 血液内科 特任助教)  
1992年東京医科歯科大学血液内科入局  
2004年大学院卒業後にアメリカに留学  
2005年脊椎の骨軟部腫瘍に罹患し、  
帰国後に腫瘍脊椎骨全摘術を受ける  
2006・2007年 再発・再々発時に、重粒子  
線・化学療法を受ける

2007年対がん活動に従事(がん患者大集

会、RFL、ピアサポート活動)

2011年東京医科歯科大学医歯学融合教育支援センターにて医学教育に従事。2012年がん総合相談に携わる者に対する研修プログラム策定委員。2013年東京医科歯科大学血液内科医として対がん活動を精力的に行い現在に至る

### 講演:山田陽子(やまだ ようこ)氏



(特定非営利活動法人がん患者団体支援機構理事・事務局長)

2000年に夫が急逝し、翌2001年に乳がん罹患。患者の立場や体験等を通して、がんと共に生きるライフワークにめぐり合い、2002年には筑波メディカルセンター

病院にて乳がん患者会(森の会—筑波メディカル・ピンクリボン会—)を設立。現在、森の会代表、特定非営利活動法人つくばピンクリボンの会理事、茨城県総合がん対策推進会議委員、筑波大学附属病院治験審査委員会委員、霞ヶ浦医療センター倫理審査委員として活動中。又ピアサポーターとして、がん患者やその家族への支援を続けている。

### 講演:古塚千紗(ふるつか ちさ)氏



(特定非営利活動法人がん患者団体支援機構 ピアサポーター)

38歳で乳がん罹患。自らのがん体験から医療に興味を持ち、治療でお世話になった病院でボランティア活動を始める。

その後ピアサポーターも始め、さらに専門的な知識を深めるために社会福祉士の資格

を取得。今年から、医療ソーシャルワーカーとして会社員より転身。

### シンポジスト:西巻佳子(にしまき よしこ)氏



(武蔵野赤十字病院 乳がん看護認定看護師) 千葉大学看護学部附属看護実践研究指導センター認定看護師教育課程2006年3月終了。同年、乳がん看護認定看護師資格取得。武蔵野赤十字病院に勤務し、病棟、外来で乳がんをはじめがん看護に取り組み、現在はがん相談支援センターで認定がん専門相談員、

両立支援コーディネーターとして活動している。

### 司会:木蘭(ムラン)氏



(特定非営利活動法人がん患者団体支援機構 副理事長)

24年前「鼻中隔がん」で大手術。顔の真中はスッポリ空洞、嗅覚無し。

Net-TV「CanpsStation」「リライフ談話室」パーソナリティー、歌手、司会、シンガーソングライター。

「頭頸部がん患者と家族の会 Nicotto(ニコット)」会長。

「日本におけるピアサポートの現状」

【ピアサポートとは】

ピアサポートとは「同じ問題や状況を持つ人が、情緒的に支え合い、その問題に適切に対応するための知識を共有していく関係」（Cancer Care For the Whole Patient 2008）を意味します。ピアサポーターとは自らの体験を他者が活かせる形で提供することにより、患者・家族を情緒的に支え、患者・家族のリテラシーの向上に貢献する役割を担うものと言えます。つまり、ピアサポーターは、患者・家族の相談乗り何らかの解決策を与えることを目的としておらず、同じ体験者として自分の体験を語ることで、患者・家族に寄り添い、場合によっては希望を与え、問題解決につながるヒントを与えることがその主な役割なのです。

【ピアサポート活動の種類】

ピアサポート活動にはグループで行う形のものや個別の対応で行う形のものがあります。前者で代表的なものは患者会に代表されるセルフヘルプグループとがんサロンに代表されるサポートグループです。後者はピアサポート外来やピアサポート面談という形で行われます。最近ではインターネットを介したグループによるピアサポート活動も盛んに行われるようになりました。また、がん教育や緩和ケア研修などでがん体験者の方が自分の体験を語るという活動も広い意味でのピアサポート活動に該当するとの意見もあります。

【ピアサポートの活動の形態】

- ①グループ：・セルフヘルプグループ
  - ・サポートグループ（医療者と共同で実施）
- ②個別の対応：・一対一（一対二）
  - ・治療体験の語り手（相談支援センター）
- ③インターネット上でのグループ活動
- ④教育研修での語り手：・がん教育 ・緩和ケア研修

【ピアサポートの効果】

ピアサポートの効果を検証する研究は今まで行われてきましたが、そもそも臨床試験などに不向きな領域であるので直接的に科学的に確立した結果は判明していません。現時点で明らかになっていることとしては以下の3つが挙げられます。

- ①参加者の満足度は高い
- ②参加者の知識の向上、対処方法の向上、自己効力感の強化の報告がある
- ③心理社会的介入効果は比較試験で出るほどの強力な効果は示されていない。さらに、ピアサポーターには、自分の体験を語るスキル、患者・家族の話を聴くスキルなど、一定のスキルが必要であることも明らかになっています。

【ピアサポートに関する国の動き】

ピアサポートに関しては第3期がん対策推進基本計画に、「患者団体及び関係学会と連携し、研修プログラムを改訂するとともに、がん患者・経験者、がん診療連携拠点病院の医療従事者、都道府県担当者に対して、ピアサポートや患者サロンに関する研修を実地する」とより積極的な活動が明記されました。日本サイコオンコロジー学会は厚生労働省からの委託を受け、ピアサポートの現状調査、ピアサポーター研修プログラムの改訂並びに都道府県やがん診療連携拠点病院での研修の支援を柱とする「がん総合相談に携わる者に対する研修事業」を開始しました。

同事業では令和2年度より毎年報告書を作成しています。各都道府県のピアサポートに対する取り組みや同事業でどの程度ピアサポーター研修が行われたかなどを知ることができますので是非 <https://www.peer-spt.org/> のウェブサイトをご参照ください。

【ピアサポートの現状】

日本サイコオンコロジー学会の「がん総合相談に携わる者に対する研修事業」の調査等から明らかになった、現時点での本邦でのピアサポートの現状をまとめると以下の様にあります。

- ①ピアサポーターの養成
  - ・教育研修は都道府県を主体に増加しているが、一部都府県で取り組みが不十分
  - ・継続研修・スキルアップセミナーがまだ十分行われていない
- ②マネジメント
  - ・研修を修了したピアサポーターの登録・更新は質の担保の上で重要だが不十分
  - ・ピアサポーターを守るしくみとしてスーパーバイズ、フォローアップ、医療者によるバックアップが必要だがまだまだ未整備
  - ・医療機関間連携には調整窓口が必要かつ重要だが、そのような機能あるいは部門の明確化が達成できている都道府県はごく一部
  - ・活動の場の確保はがん診療連携拠点病院が主体だが、一部では地域包括の枠組み乗りようも始まっている
- ③医療者・地域（行政）との協働
  - ・都道府県のがん対策推進協議会、部会の所掌などには極めて大きな地域格差あり

【今後のピアサポート】

厚生労働省委託事業（がん総合相談に携わる者に対する研修事業）の令和4年度事業報告書に、ピアサポートに関する都道府県やがん診療連携拠点病院への提言がまとめられています。ここで、一部を抜粋して紹介いたします。

- ①都道府県（自治体）に求められる活動
  - ・ピアサポートの養成・活動計画を策定し実施するための協議体を設置すること
  - ・都道府県のがん対策推進計画においてピアサポートの養成・活動計画を立案すること
  - ・活動を推進するための予算を確保すること
- ②都道府県（自治体）と協議体で具体的に検討し実施すること
  - ・ピアサポーターの活動の場の設置
  - ・ピアサポーターの養成研修を企画・開催
- ③都道府県がん診療連携協議会で実施すること
  - ・都道府県内のがんサロン活動の開催情報を収集し、拠点病院間で共有できる体制を作る
  - ・研修を受けたピアサポーターや十分な経験を有する患者団体等と連携したがんサロン活動が各拠点病院で展開できるように、各拠点病院を支援する計画を立案し、実施する
- ④各がん診療連携拠点病院等が実施すること
  - ・施設内（医療機関内）でピアサポートやがんサロンを推進する部署・担当者を明確に定める
  - ・がんサロンを企画・運営する組織を作り、研修を受けたピアサポーターや十分な経験を有する患者支援団体と協力する
  - ・がんサロンやピアサポートに関する業務に関わる医療スタッフをピアサポーター養成研修やフォローアップ研修に派遣する
  - ・ピアサポーターのフォローアップ研修への参加を促し、燃え尽き防止などピアサポーターを守る仕組みを作る



第19回がん患者大集会

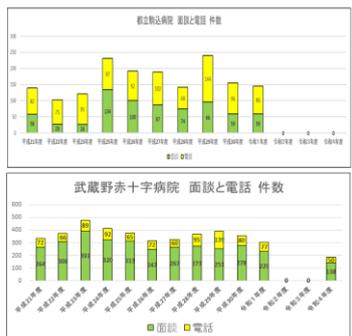
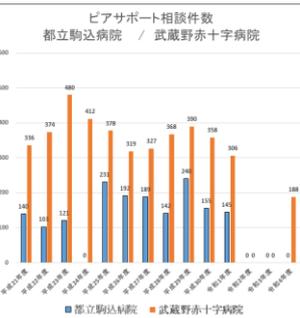
2023年10月29日

## ピアサポート活動について

1. 平成21年度から令和4年度の活動報告
2. ピアサポーターフォローアップ研修会
3. ピアサポーター養成講座について

特定非営利活動法人 がん患者団体支援機構  
事務局長 山田 陽子

### 1. 平成21年度から令和4年度の活動報告

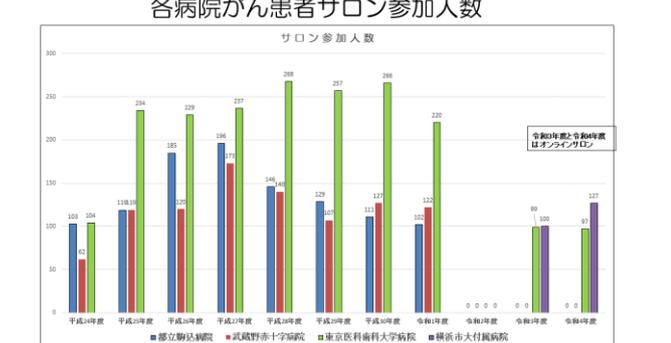


### ◎ピアサロン

**東京医科歯科大学病院**  
オンラインサロン開催  
名称：「おしゃべりサロン」  
毎月第3火曜日 13:30~14:30  
電話：03-5803-4008  
病院HPより事前申込み  
ファシリテーター：2人体制

東京医科歯科大学病院  
おしゃべりサロン  
2023年11月開催

### 1. 平成24年度から令和4年度の活動報告



### 3. ピアサポーター養成講座について

養成講座名	年度	日数	開催場所
東京都第1回養成講座	平成19(2007)年	2日間	東京都庁第一本庁舎
東京都第2回養成講座	平成20(2008)年	1日間	東京都庁第一本庁舎
支援機構第1回養成講座	平成22(2010)年	3日間	東京医科歯科大学
支援機構第2回養成講座	平成23(2011)年	3日間	東京医科歯科大学
支援機構第3回養成講座	平成24(2012)年	3日間	東京医科歯科大学
支援機構第4回養成講座	平成25(2013)年	3日間	東京医科歯科大学
支援機構第5回養成講座	平成26(2014)年	5日間	東京医科歯科大学
支援機構第6回養成講座	平成27(2015)年	5日間	東京医科歯科大学
支援機構第7回養成講座	平成28(2016)年	5日間	東京医科歯科大学
支援機構第8回養成講座	平成29(2017)年	5日間	東京医科歯科大学
支援機構第9回養成講座	平成30(2018)年	5日間	東京医科歯科大学
支援機構第10回養成講座	令和元(2019)年	5日間	東京医科歯科大学
中止	令和2(2020)年		
中止	令和3(2021)年		
支援機構第11回養成講座 オンライン開催	令和4(2022)年	5日間	オンライン

### ピア相談 相談場所の様子

**都立駒込病院** 対面・電話相談  
毎週火・金曜日 10:00~13:00  
(年末年始、祝日を除く)  
☎ 03-3823-2536  
相談場所：医療情報室「こまどり」  
ピアサポーター：2人体制

**武蔵野赤十字病院** 対面・電話相談  
毎週月・水曜日 11:00~15:30  
(年末年始、祝日を除く)  
☎ 0422-32-3282  
相談場所：1階 ローソソ前  
ピアサポーター：2人体制



### 案内チラシ

### ◎ピア相談/ピアサロン

**横浜市立大学付属病院**  
(現在休止中)  
毎月第1金曜日 13:00~17:00  
☎ 045-787-2800  
ピアサポーター：1人体制

**横浜市立大学付属病院**  
ハイブリッド開催  
名称：「はまかせサロン」  
毎月第2金曜日 15:00~16:15  
病院HPより事前申込み  
ファシリテーター：1人体制

### ◎ピア電話相談

**世田谷区保健センター** 電話相談  
(対象：本人または家族が世田谷区在住者)  
毎月第2・4木曜日 9:00~12:00  
☎ 03-6740-9011 (年末年始、祝日を除く)  
ピアサポーター：1人体制



### 2. ピアサポーターフォローアップ研修会

年度	回数	テーマ	講師	開催方法
2020年度	第1回	コロナ禍で中止		
	第2回	「オンラインサロンにおいてどのようにして安心・安全の場を作るのか。とちを考える」	早井 理心氏	内部研修/オンライン
	第3回	「withコロナの時代、ピアサポーターとして何が出来るか」	坂下 千穂子先生	内部研修/オンライン
	第4回	「ピアサポーターだからできるスピリチュアルケア」	玉置 妙恵氏	公開講演会/オンライン
2021年度	第1回	「コンプライアンス研修」	早井 理心氏	内部研修/オンライン
	第2回	「グループワーク-喪失の語りに耳をします」	藤原 幸江先生	内部研修/オンライン
	第3回	「がん患者さんを支えるピアサポーターの育成を目指して」	坂下 千穂子氏	内部研修/オンライン
2022年度	第1回	「腫瘍部がんについて学びましょう」 講演/体験談	西本世一先生他	公開講演会/オンライン
	第2回	「ピアサポーターの役割と活動指針」	坂下 千穂子先生	内部研修/オンライン
	第3回	「コンプライアンス研修」と「電話相談の事例から学ぶ」	早井 理心氏	内部研修/オンライン
	第4回	「継続ワークの実践」	小川 裕子氏	内部研修/オンライン
2023年度	第1回	「がん相談の事例から学ぶ」	赤穂 理絵先生	内部研修/オンライン
	第2回	「ピアサポーター対面相談 実践ロールアップ研修会」	西橋 佳子看護師	内部研修
	第3回	「オンラインサロンの実践」と「コンプライアンス研修」	坂下 千穂子先生	内部研修
	第4回	「がん患者さんの心をつなぐ ハート2」	西橋 理絵先生	内部研修/オンライン

☆年4回の研修会の内2回以上の参加を必須としている

### 3. ピアサポーター養成講座について

2019年度 / チラシ

2022年度プログラム

養成講座修了証

### 「AYA がんをきっかけにキャリアチェンジ」

私は、38歳で右乳がんに罹った AYA 世代がん経験者です。将来へ向かっている時期のがん経験は、自分の生きる意味も疑うほど重いものでした。しかし手厚い医療に感銘を受け、お世話になった都立駒込病院でボランティアを始め、そこでピアサポートと出逢いました。その後、私も当団体の研修を受けピアサポーターになりました。

ピアサポート活動をするうち、私はその世界の奥深さに惹かれ、引き出しをもっと増やし、さらなる成長を遂げたいと思うようになりました。これが会社員から医療へキャリアチェンジをしたことのきっかけとなり、その後、社会福祉士の資格を取得したので。現在は急性期病院の MSW として勤務しており、聴く力や話す力などピアサポートに必要な多くのことを学んでいます。

私は、誰かの経験談が誰かの勇気になるかもしれないという思いを込めて、今回私のエピソードをお話させていただきました。AYA 世代がん経験者の場合、同じ境遇の人が身近に少ないうえ仕事や学業などで忙しく、支援が必要でもなかなか一歩踏み出せないことも多いでしょう。そのため、手の届く場所へ様々な支援の手があることが大切と考えています。多様な経験談の共有などもその手段の一つです。SNS などの IT 資源を活用し、個々の経験談や支援団体の活動内容などを広く発信していくことも、これからのピアサポート活動のひとつといえます。私も「AYA がんのキセキ」（幸紗チサ名義）というブログを執筆しています。ひとりでも多くの人に「ピアサポーターはいつでも私たちのそばにいる」と感じていただくことが、今後のピアサポーターの存在意義を深め活動の場を広げていくための、ひとつの鍵となるのではないのでしょうか。

また、今後支援の幅を広めるためには、ピアサポーター自身も活動内容を発信し、興味のあるイベントなどへ参加してみるネットワークの軽さも大切です。こうして新しいつながりを構築していくことが、今後もピアサポートを全国へ広めていくために必要な活動だと私は考えています。

ピアサポーターの存在を皆さまへ知っていただき、実際に会ってお話していただくまではさらに時間がかかることでしょう。必要なときにいつでもつながることができるよう、「継続は力なり」「常に進化を」という気持ちを胸にこれからも活動を続けていきます。私にとってピアサポート活動とは、多くの経験と学びがあり、がん患者である私自身の活躍の場でもあります。そして、今後の人生を豊かにするための経験を積める貴重な場なのです。これからもひとりでも多くの方へ寄り添うことができるよう、精進してまいります。

### ■ シンポジウム 「ピアサポート活動のこれから」



【福智】：それでは第 2 部シンポジウム、テーマは「ピアサポート活動のこれから」を始めます。コーディネーターを東京医科歯科大学血液内科特任助教の医師であり、ご自身もがんサバイバーの坂下千瑞子先生をお願いいたします。坂下先生、よろしく願いいたします。

【坂下】：ご紹介いただきありがとうございます。ここからは佐々木治一郎先生、山田陽子さん、西巻佳子さんにご登壇いただいております。始めに、簡単な自己紹介と、どうしてピアサポートに関わられるようになったのかというお話と、ピアサポートの一番の強みというのはどういうふうに捉えられていらっしゃるかということをお聞かせいただけたら

などと思います。佐々木先生からお願いします。

【佐々木】：私は 2011 年から北里大学に赴任させていただきまして、抗がん剤の治療等をする通院治療室の責任者を今までずっと行っています。北里大学病院では僕が赴任する前から、がん体験者の方にがんサロンの運営委員の中に入れていただいて、病院で予算をとってやってる素晴らしいがんサロンがありまして、そのがんサロンの運営委員会の委員長もさせていただいています。ピアサポート活動の歴史ですけれども、前任地の熊本大学病院の時に、2008 年か 9 年に、ある一人の頭頸部がんの患者さんが「先生達は絶対がんは治ったって言ってくれないんですよ」とおっしゃるんですね。「病院の放射線治療の脇でエレベーターの横に長椅子があるんだけど、そこで患者どうして喋ってたことにすごく癒された」と。そういう場所を公的に作りたいので手伝ってほしいと言われて、それで熊本大学医学部附属病院に熊本県で最初の公的ながんサロンというのを作ったのが、こういう活動をするきっかけになってます。それから瞬く間に熊本県ではがんサロンが広がって、熊本がんサロンネットワークというのできて、どこのがんサロンでも参加可能みたいな形になっていきました。その成功体験があって、皆さんの力を具体的に知ったということで、今もその活動をしています。ピ

アサポートの一番の強みは、ピアサポーターの方は、新しく来たがんの患者さん達にその体験を語るということで、語っている方も参加してる方からエネルギーを受けて、それを聞いたがんの患者さんもやはり全く真っ暗闇なところに通ってきた人の姿を見ることで、病気の向き合い方を学ぶということがあり、ずっとこういう活動をしてるとそれを知ることが多くて、それが本当に強みじゃないかなと思います。

【西巻】:武蔵野赤十字病院の西巻佳子です今日はこのような機会を与えてくださりまして、大変ありがとうございます。私は今ここに上がったばかりなので、自分の話も、ほんの少し話させていただきます。今日ここにいらっしゃる方を拝見しますとお会いした方もいらっしゃるの、武蔵野赤十字病院をご存知な方もいるかと思えます。武蔵野市にある611床の総合型の病院で、地域のがん診療連携拠点病院です。救急医療とがん医療、周産期医療の3つを活動の柱として、地域医療にも力を入れている病院です。私は現在がん相談支援センターというところで活動させていただいています。

私の経歴は資料にもありますが、元々病棟と外来とがん診療、がん看護のほうに携わってきて、ある事をきっかけに乳がんに関心をもち、乳がん看護認定看護師という資格を2006年に第1期生として認定させていただきました。それ以降、乳がんも含めて様々ながんの患者様と携わり、現在がん相談支援センターの選任相談員として活動しております。どうして私がピアサポーターさんと関わっているかというのは、前任者、前々任者がキバラさん達と深い関りを持ち、このようにピアサポーターさんと関わるきっかけをくださいました。そこで、駒込病院さんとうちと一緒に協働してピアサポートを開始する一つの施設となって、そこがきっかけで今日に至ります。私は相談支援センターで、今年5年目になるのですが、ピアサポーターさんと一緒にいろいろ行ったり考えたり、5年目にしようやくいろいろできているかなというような実感がいたします。ただ、この歴史を拝見しますと、私が知らないことがいっぱいありすぎて、今日は病院に持ち帰ることが多くなったんじゃないかなと実感しております。ピアサポーターさんの強みというのは、相談者ががん体験者に病気は違っても一人じゃないんだと実感できる事です。それは常々思っています。私達医療者にお話ししても、心のどこかに(これは時々患者さんから伺う話でもあるんですけども)「うーん、やっぱり体験してみないとわからないこともありますよね」という言葉かけがあったり、できれば同じ体験した方とお話したいという言葉も聞かれます。やはり自分だけじゃないんだという、お気持ちにピアサポーターさんと一緒に話す時にはなっているということを感じております。それが大変な強みだというふうに私は思っています。



す。

【山田】:改めまして、山田陽子と申します。私は2001年に乳がんになりました。その時に毎日放射線治療の待合室で同じ乳がんの仲間達と会った時に、抗がん剤で眉がなくなって、待合室で眉の描きっこをしてたんですね。その時に、これは何かそういう会を作ったほうが良いかなと思って、自分の抗がん剤が終わった翌年に、筑波のほうで患者会を立ち上げました。自分自身に与えられた使命を改めて振り返りながら、20年以上患者会活動をしてきてがん患者団体支援機構とも関わるようになって、今こういう形で話をさせていただけるのは、嬉しい限りです。ピアサポートの強みというお話ですが、相談者が来た時は暗い顔で来られたのに、相談が終わって「ここで話を聞いてもらって少し気持ちが楽になりました」とか、「とても良かったです」というお言葉を聞いて、この仕事に関わっていますごく嬉しいなど、私自身も相談者に育てられている自分を今も感じています。

【坂下】:皆様のお話を伺っていると、改めてピアサポーターの重要性を感じます。佐々木先生がおっしゃったように、サポートしている側(サポーター)も実はエネルギーをもらっていたり、相談者の方も元気づけられて気持ちが楽になってほっとして帰られる、そしてサポーター自身も元気になれるという意味では、本当に素晴らしい活動です。良い形でこれが継続していくということを今後考えていきたいなど感じております。

いくつかテーマを提案させていただきます。ピアサポーターを育成するプログラムについて、これは佐々木先生のご発言の中にもありましたように、かなり確立したものができてきています。当支援機構としてもこれまで20年かけていろいろ培ってきたノウハウがあり、いろんな形で良いものができあがりつつあります。けれどもそれがなかなか浸透していつてなかったり、ピアサポーターの質を担保していくということがなかなか難しいのかなというところなんです。このプログラムをどういう形で広く浸透させていくか、質を担保していくためにはどういうことを考えていけば良いか

を、皆さんのお知恵をお借りしたいなと思います。

【佐々木】:基本的なプログラムは私の認識では、もう完成していると思うのですが、それが浸透していないというのは、誰がその研修を行うかというところですね。例えば拠点病院とか都道府県とかいうところで、黙っていても手を挙げてくれないというのが、1番の問題かなと思います。改定委員会のほうでは、都道府県、そして拠点病院のほうで、まずは主体としてやってほしい。それを手伝えるファシリテーターがいなければ、地元にいる研修活動をやっている患者会とか患者支援団体に委託するとか共催するという形でやってほしいという運動を今進めています。ですので、今後は浸透してくると楽観的にみえています。ピアサポーターの質の担保に関しては、プログラムがあっても本当にその質が保たれてるかっていうのは、やはりその都度アンケート等をとるとか、あるいは資格をとった人がその後どう活動していくかというのをみていかないといけません。その体制は先進の都道府県等でもあまり充実しているところはなくて、私の知っている限りでは例えば千葉県とかでは、フォローアップを受ける人達が皆もう胃が痛くなるから辞めようかなというぐらい、フォローアップ研修をやられてるみたいです。しかしそういうところは数少ないと思いますので、今後は初期研修よりもピアサポーターのスキルアップセミナーとかフォローアップ研修の充実が課題かなと思ってます。

【西巻】:まさに佐々木先生がおっしゃってるプログラムどおりなのだろうと思います。本当にそれが進むのであれば、ピアサポーターの周知も全国に広がっていくのじゃないかなと思います。プログラムをどういう形で進めていくのか、病院なのか、それとも地域なのか、そういうお話にどうしてもなってしまいます。私もいろんな病院さんとお話したりする機会が大変多いですが、その中で皆さんまだ手探りであったりするのは、私もこういう立場なので、その事情もわかるが故に何とも進まないんだなという感じです。

ただ、少なくともうちの病院はピアサポーターさんに協力いただけてる病院の一つなので、自分達の組織のことができる限り地域の病院、施設に機会があれば伝えていくということをしています。もう一つ、質の担保ということですが、私も今年第1回目のフォローアップ研修を担当させていただいたのですが、皆さんの向上心に圧倒されるというか、すごく熱意があって、私もそこで皆さん達の大事な役割を聞かせていただく大事な時間となったわけなんです。その研修が皆さんの質の向上に絶対繋がっているんだなと思いました。多くの感想もいただき、皆さんの気持ちも聞かせていただいているので、フォローアップ研修が少なくとも質の向上に繋がると実感しております。

【坂下】:自分達の組織で上手くいってることを広く皆さんに伝えていくことが大事とご発言されていたことがすご

く印象的です。佐々木先生のところも非常に上手いかわれているので、それぞれがもっと声を大にして、伝えていくことは、これからどうしようかなと思ってる施設にとっては非常に有意義な情報だと思います。どういうところがきちんとできているのかを、集約して出していくことも大事なんだなと改めて感じました。

山田さん、続いてご意見をお願いします。

【山田】:私は10年ぐらい当機構の事務局をさせていただいています。サポーターの方には性格も個性もありますので、そのへんをいかにスキルアップして、質を担保していくことが必要だなと感じていて、年に4回のフォローアップ講習会を毎年開催しております。当機構では必ず最低2回受講するというのを義務付けております。もし参加できない時にはレポート提出ということで、必ず年2回は自分を振り返りながらピアサポーターの質の担保に力を入れております。養成講座の時にジュニアコースとか初級コースって名前がスライドの中にありましたが、「シニアコースはあるんですか」という問合せがありました。事務局としては、スキルアップをしてるうちに皆さんがシニアサポーターになってるんだと考えています。今年度は初級コースということで名前を変えたんですけども。事例相談の時に人間ですので失敗はあります。その時に西巻看護師さんも含めて振り返りを行いながら、問題を家に持って帰らない、その場の相談のことは皆さんで共有して悩みをそこに置いていくということを基本的に考えています。事務局としてはピアサポーターの皆さんを守っていかないとはいけません。家に持って帰らずにそこでの振り返りを行うことで、また気付きをもって二度と失敗はないような形でやっていけたら、ピアサポーターの質の担保にも繋がるんじゃないかなと思っております。



【坂下】:特に西巻看護師さんとの連携が非常に上手いって、振り返りがきちんとできていることによって、問題点や検討すべき課題のようなものが見つかった度にフォローアップ講習で皆で相談したり考えたりしていることは、本当に一步一步の前進に繋がっていったらと思うと感

しました。さらにこのカリキュラムによってピアサポーターを目指そうという方々をどういった形でリクルートしてくるかとか、ピアサポーターになられた方が安心してピアサポートを続けていけるための支援が国とか病院でどこまでサポートしてもらえるのかということも非常に大きな問題かと思えます。佐々木先生のところではいろんな仕組みを作られてると思うんですけど、どうなんでしょう。

【佐々木】:どうリクルートしてくるかということについて、例えば今年度(正確には来年度から)神奈川県では、ようやく神奈川県の主催としてピアサポーター研修が始まる予定になってます。第1回のピアサポーター研修はどのような形にするかという時に、まず初回なので各拠点病院で既にいろんな病院でボランティア活動をされていて、病院側の顔が見えているがん体験者の方を、病院側から推薦して参加していただくというリクルートの方法もあるかなと思います。既にがんサロンをやっているところに来ている人の中で、この人はどうかという人に向けてやっていくという方法ですね。ピアサポーターの方をどう守っていくかということは非常に大きな課題になっていると思います。それぞれのピアサポート活動の後に振り返りを行ったところで、先ほど山田さんもおっしゃったようにそれを家に持ち帰らない、その不安をとるような形でフィードバックしていくという実際現場でのフォローが大事です。システムとしていろんな議論もありますが、ピアサポート活動がいつまでもボランティアだとなかなか継続も難しいので、せめて交通費とか1日の手当とか、そういったのが出せるような仕組みとか予算化が実際はピアサポーターを守っていくことに繋がるのかなと思っています。それを実現できている都道府県もありますので、決してできないことはないと思っております。

【坂下】:山田さん、継続的に働けるようなピアサポーターの活動について、交通費やボランティアとしてこのままやっていけるのかということあたりについては如何ですか。



【山田】:大変有難いことに、東京都から委託ということでお金を貼りつかせていただいて、ちゃんとピアサポーターには時給(今の認められている時給までいってるかどうか

微妙なところがありますが)それに準じたお金は謝金としていただいていますし、交通費も実費をお支払いしています。運営に関しても多少事務局の運営経費も加えさせていただいて契約をいただいています。武蔵野赤十字病院と駒込病院、あと他にも3つの場所に派遣事業をしていますけども、そちらもそういう形でちゃんとお金は契約させていただいて運営しております。

【坂下】:皆さん最低限の交通費であるとか有償ボランティアという形で継続ができるという意味では、有難いことだと思いますが、全部が全部そういうふうになってるというわけではないのが現状かと思えます。思いの強いがん患者さん達が次の人のために、あるいは自分が助けられたという思いによってされているということも多々あるかと思えますので、是非そういう体制が整っていくことを願っています。

それでは、次の話題に移らせていただきます。社会全体にまだピアサポート活動の意義というのが、認知されてないという部分があるのかなと感じています。ピアサポート自体に患者さんが触れる機会をなるべく多く作るということも大事だと思いますが、そんなところ行って何があるのかなみたい思っている患者さんもいるかもしれないですし、先生方もどういうところなのかなと思われている方も多いかもかもしれません。認知度をあげていくためにされてる工夫やお知恵を佐々木先生から順番にお願いします。

【佐々木】:私から小さい周知と大きい周知の話させて頂きます。小さい周知については本当に病院の中でも知らない人が多いです。特に医療者です。例えば北里病院もがんサロンやってますけど、がんサロンやってるということ知らない主治医クラスの先生方もたくさんいらっしゃいます。それで最初にやったことはがんの告知の時に渡すパンフレットの中にがんサロンの開催通知を挟み込むところから始めています。病棟にもポスターを貼ったりしています。医療者にもわかってほしいのに、実際現場を見に来た医療者っていうのは本当に5本の指に入るぐらいしかなくて。もう10年以上やってるんですけど、本当にそこは一つの壁で我々の努力がさらに必要かなんと思っています。良いアイデアがあったら、皆さん教えてほしいと思います。もう一つは社会への周知ですけども、これは実際にやはり体験をした人がどんどん発信していくこと、先ほどのご発表ありましたけど、ピアサポートで元気になったとか、ピアサポートやってこんなに利用者が輝いているというような、良い事例を社会に周知していただくというのがまず効果が高いです。それから今がん教育が義務化されましたので、そこががんの体験者の方、ピアサポート活動をされてる方もおそらく参加されると思いますので、そこにこういう患者どうして話し合うことでより良くなるんだよみたいなメッセージを入れていただく。がん教

育の中にピアサポート活動のことが入ってるのはあまり見たことないので、そういうのも一つの工夫かなというふうに思っています。

【西巻】:実はここ一月ぐらいの間の事ですけれど、ある体験者からピアサポートのことを聞いて、サポーターさんと一緒にお話しをしたことによって、良い場所を見つけたとすごく感じられている患者さんいらっしゃいます。その方がピアサポートを知っていただくために同室の患者さんや、医療者に伝えて、それを聞いた患者さんがその場所ってどこ?と私に聞くことがある。また、それを聞かれた医療者がこのところ数人いてピアサポートってどこでやってるの?という話があり、患者さんの評判やお話してすごいんだなというふうに感じております。佐々木先生がおっしゃったように、社会的にもそれは非常に大事なことだなと思いました。周知方法として、やはり同じくうちもポスターをたくさん貼って案内もしているつもりです。コロナが終わってから再開した時、ピアサポートがゼロの日が続いたんです。これはきついなって思った時に、逆にサポーターさんのほうからもっと宣伝してもらえませんか?と言われたんですね。やはりそういう声というのは非常に大事にしなければいけないと本当に思いました。

それから、開催前には玄関や相談室の前などに、ポスターを今日ありますと貼るようにしました。そしたら、少しずつ相談件数が増えたので、やはりこれは効果があったんだなと思っています。それと、坂下先生のスライドにもあったように、がん相談支援センターを知って行ったら良い結果だったというアンケートの結果を私も見ておりました。やはり患者さんに知らさなきゃせっかくこんな良い場所があるのもったいないなと思いましたので、患者相談支援センターの案内とともにピアサポーターさんの案内をそこに含めることに今取り組んでいる最中です。その成果がまた出れば良いなと思っています。

【坂下】:人の噂って良い形で伝わっていくと、すごく力があるんだなということと、やはり質の高いピアサポート活動を提供していれば、それがまた伝わっていくという事、改めてそこも大事なんだなと感じました。

【山田】:医療者への協力とか、発信について私自身も患者として感じているところがあります。病院の先生は忙しいので患者は質問したいことがなかなか聞けなかったりということは、相談の中にもよくあるんです。そこで西巻さんのように専門の看護師さんがサポートして、いろいろ知恵をくださると、先生達・看護師さん達・病院の医療関係者の方が患者さんに「こういうところへ行って話してみたら?」というご案内をしていますよということを知っています。患者にとってはとても良い情報で、そのへんも先生方や医療者の方と上手くコミュニケーションを今後もとれるように私達もしていけたらなと思っています。あと一つ、

ピアサポーター自身が発信することってとても大事でそのとおりだと思いました。実は駒込病院で、先日、このところ電話の繋がりも良くなかったりして相談者がゼロの日が続いたんです。その時の担当のピアサポーターがちょっと外に出てお声をかけたら、その日は相談が増えたんですよ。ただ待っているよりもちょっと出しゃばりかなと不安を感じながら、ピアサポーターは活動したかと思いますが、でも歩いている方の様子を見てお声をかけたらその日はとても相談が増えて、病院関係者の方もとても喜んでいたりという実例があります。私達も邪魔にならないように発信しながら、良い形で病院側と繋がっていけば良いかなと思っています。

【坂下】:せっかくですので、フロアから社会全体にピアサポートの活動の意義を認知していただくために良いアイデアをお持ちの方いらしたら、是非ご発言いただけたらと思いますけれど。

【会場参加者】:私は駒込病院の緩和ケア病棟ボランティアです。ボランティアの志望動機は、家族がお世話になった恩返しをしたいのが8割ぐらいで、自分がかんキャリアなので、実際に緩和ケア病棟の人と話ができるということです。ただ、実際の研修は消火器の使い方とか、車椅子の押し方ぐらいなんです。むしろ自由に振舞ってください。例えば音楽を奏でたり、絵を描いたり、それからガーデニングをしたりと、そういうふうに緩和ケア病棟の中に入れるという仕組みを駒込病院の緩和ケア部長の田中先生が12年前に作って、今ボランティアとしてのびのびやっています。緩和ケア病棟にボランティアがもっと増えたら良いなとは思うんですけど、病院の先生方のご意見伺えればと思います。

【坂下】:ご自身がお病気をされて、緩和ケア病棟で仲間達の支援をされたいと活動されていて、もっとそういった方がどんどん増えていけると良いなということだと思います。駒込病院は非常に特殊な最先端の病院であるということがまずあるかと思いますが、佐々木先生のところはいかがでしょうか。

【佐々木】:田中先生は僕もよく存じ上げています。いわゆる病院ボランティアという立場だと、一応病院ではルールを作ってこういう範囲でこういう活動をしてくださいっていうのがありますので、病院単位での判断になるのかなと思います。ですので、ボランティアの方、あるいは患者さんは、緩和ケア病棟の場合はご家族の方々から要望書を病院に出していただいて、それでボランティア活動を拡大していくことがまず一番近道なのじゃないかなと思います。なんで緩和ケア病棟にボランティアを増やせないのかっていうのは、ひょっとすると病院側の理由があるのかもしれないので、そこらへんを確認していただくのが良いのかなと思います。ちなみに、北里病院には緩和ケア病棟は

なくて、ボランティアの方もコロナでだいぶ縮小されてたりしたんですが入ってこれてるボランティアの方々の評判はすごく良くて、やっぱり病院としては非常に貴重な戦力で、待ち時間等で苛立っている患者さんを緩和してくれる貴重な味方だというふうに我々は思っています。そういう依頼状を出していただけたらどうかと思います。

【西巻】:武蔵野日赤病院のほうも、緩和ケア病棟というのはございません。ボランティアさんとしては、院内のボランティアさんと赤十字のボランティアさんの2つのツールがあると伺っています。院内のボランティアさんは、やはりコロナ禍で今は積極的にまだ行えてなくて、少しずつ復活はしてきていますが、そんな状況なので、今は上手くお答えすることができないと思います。ただ、先生おっしゃるように、来てくださっているボランティアさんは今までのことを振り返っても、非常に戦力になっているということは間違いないと思います。



【坂下】:東京医科歯科大学病院の緩和ケアのボランティア状況については十分把握できていないんですが、おそらくボランティアという形で活動されてる方がいらっしやらないのではないかと現時点では考えています。ただ、時間時間でオルゴールを鳴らしたりとかレクリエーションのようなものを医療スタッフの方が提供することがあると存じます。ボランティアさんが緩和ケア病棟に入られるというのは、病院の中のスタッフだけではなくて、日常の外の普通の生活に触れるという意味では、とても重要なんじゃないかと思っています。病院はどうしても安全とか規定とか多々言われてしまう部分がありますが、実際に上手くいってこういう形で動いてますよという駒込病院のような事例が広く知れ渡っていくと、次にまたそういうところが増えていくのではないかと思います。

【会場参加者】:ぜひ宣伝してください。お願いします。

【坂下】:他に、社会全体に患者さんや経験者が発信して世の中にもっと広くピアサポートの意義を伝えていくとか、どうすれば世の中の人に多く知っていただけるかということについていかがですか。

【村上】:2007年から当機構でピアサポートさせていた

だいております、村上と申します。まず、ピアサポートの意義を伝え、ピアサポートについてどうすれば良いかということに対しては、先ほど佐々木先生からもお話があったように、広義の部分では行政とか病院とかとの連携が大事かなと思っています。そして小さい部分では、やはり関わっている病院の先生方や医療関係者の方にご理解をいただいで動くことが必要なかなと思っています。私が関わらせていただいている横浜市大病院は、まず横浜市でピアサポートを導入する前に地域の方にまずピアサポートっていうのを知っていただいて、そして大学の中でピアサポートを職員の方、医療の先生方にも理解をしていただいで、相談支援センターとの連携も作った上で、ピアサポートを導入されました。そういった形でやると、ちょっと動きがまた違うのかなと思います。そして、ピアサポートの活動の中で、私は西巻看護師さんには大変お世話になっております。武蔵野日赤病院や駒込病院でもコロナ前までそうでしたが、振り返りの対応とかがあります。私は相模原協同病院で15年ぐらいピアサポートをさせていただいてますが、相談支援センターとの顔の見える関係があり、何か困ったらいつでも関わってくださる体制です。北里大学でもがんサロンをさせていただいてるんですが、やはり何か困ったらピアサポーターが家に悩みを持ち帰らないで相談にのってくれる体制があります。顔が見える関係というのはすごくピアサポーター自身にとっても大事ですし、患者さんにとってもそういったサポートの中で動くということは大きな支援にも繋がるのかなと思っています。そして、質を保つためにはどうしたら良くなっていくことに対しては、やはりフォローアップ等の研修、それからがん治療もどんどん進歩してますので、その知識も必要かなと思っています。本当にきょうは素晴らしいご講義ありがとうございました。

【坂下】:ご発言ありがとうございました。草の根といいますが、一步一步周りのいろんな立場の方に伝えていくということを地道にやられていくところが、改めて大事なんだなと感じました。他にどなたか。

【松川】:ピアサポーターをしております松川と申します。大変有意義な話を伺えて、ありがとうございました。ピアサポートの意義を伝えて広めていくには、手っ取り早い方法はないですし、やはりコツコツとした活動と広めていく努力だなと思ったところです。ただ患者さん自身がともすると主治医だけが情報源になってしまいがちだと思いますが、その他に聞く人がいるんだということも大事です。

西巻さんのような看護師さんとか、家族とか友人とか、そしてピアサポーターもいるということがわかっていると良いかなと思いました。医師も主治医だけではなくて、セカンドオピニオンを聞きに行くとかそういった方法もあるわけで、やはりあまり絶対的な存在っていうふうになっ

まうのは、患者さんにとっても行き詰ってしまうのかなと思いました。そういった可能性があれば、私達のような NPO にも活動の可能性がさらに広がっていくのかなと思いましたので、患者教育とか、何か意識を変えていくようなアプローチがあれば教えていただけたら有難いです。

【坂下】:世の中の意識を変えていく上で佐々木先生何かお答えありますか？

【佐々木】:ご質問ありがとうございます。今のお話は本当にそうだと思うんですね。村上さんのお話しもありましたけど、上手くいってる人ってやっぱり顔の見える関係がそれぞれの医療者としてきていて、そこがまた周知にも繋がっていますので、やはり今後はキーワードはネットワークだと思っています。ピアサポート活動をしている者全部がネットワークを作って、情報を協働して発信していく。そうすると安心感に繋がる。どこ病院の何とか先生と繋がっている NPO だよ、みたいな。それが今後必要なんじゃないかなと思いますので、ぜひこの支援機構がハブになってそういったネットワークを作って、そこに病院の中で協力してくれる医療者がついてくる形にすれば上手くいくんじゃないかなと思います。ただ、そこで今度は病院の患者さんにどう広めるかっていうハードルが出てくるんですが、少なくとも NPO 側から患者さんをリクルートしてくるのは、しやすくなるのかなと思いました。

【坂下】:以前ピアサポーターについて議論した時にご登壇いただいた駒込病院の出江先生が、非常にピアサポートについて理解の深い先生で、自分の患者さんにはピアサポートのことを言うてくださって、それにより来ていただいた患者さんが多かったと思います。喜んでいただけた患者さんの声をまた先生のほうに戻して、そういう関係がいろんなところでできているのは、本当に大事だなと思います。生の声が他から聞けるというのは、有難いなと思います。

【船橋】:ピアサポートをやっております船橋と申します。私は支援機構が担当してる病院全部で一通りやっています、この病院ではこういう周知の仕方が足りないとか、ここは大丈夫かなとかってというのがわかってきてはいるんですけど。先ほど西巻看護師さんがお話しされたあの話、実は私なんです。ある同じがん部位の患者さんがいまして、その患者さんの担当をしてみませんかという話が出てきて、たまたまその時にいてくれたピアサポーターの人が私を紹介したいということで、連絡をとってくれ面談をしたことがあるんです。そしたら非常に喜んで下さって、また会いたいということで、そういう一つ一つの積み重ねというのも非常に大事だなと。その患者さんのレベルにあったステージとか、こういう患者さんだったらこういう話をすれば話がわかるなっていうところで、こちらのポケットも広くたくさん作っておかなきゃいけないなと思っています。こちら

の知識を拡充しておく必要もあるんじゃないかなとこれもピアサポートにおける課題だなと私は思っております。

病院でも相談支援センターとの繋がりも必要だと言うことがあって、コロナ前ですと例えば駒込病院では出江先生の話にあるように、相談して振り返りをしてくださったんですけど、最近それがなくなってしまってます。そうすると先生方のピアサポートに対しての理解が、伝わっているのかなと、こちらも不安に思ってきました。前に武蔵野赤十字病院では緩和ケアの時にピアサポーターの話をしていったことがあったんですけど、それで先生方にも十分説明できたかなと思うんです。そういう形で相談支援センターをとおして先生方にもいろんなコンタクトができるような形とれると、非常に良いんじゃないかなと思っています。私は、相模原協同病院でもピアサポートやってるんですが、そこにも相談支援センターの看護師さんが今日はどうだったというお話しをしてくださって、きちっと今日は、こういう形でしたと話ができます。そういう形っていうのもやはり必要かなと思います。横浜市大病院のサロンについても、最初から最後まで相談支援センターの方が来られて、どんな話してるかというのをちゃんと時間中みている。非常にあとはやりやすいなと思います。相談支援センターとの密接な連携、それから患者さんとの気持ちをちゃんとわかって、こういう形で話ができるというようなこちら側の自助努力も必要です。両方でそういうことをきちっとしていかないと、やっぱり伸びていかないなと思っています。

【坂下】:病院側との連携というのがやはり大事だということを改めて感じました。他に何かご意見とかは？

【矢作】:がん患者団体支援機構ピアサポーター養成講座修了者の矢作と申します。2点お伺いしたいんですけど、1点は私このピアサポーター養成講座修了書を持って地元の県に行ったんですけども、受入れていただけませんでした。やはり地元の県の養成講座を受けないとダメだということなんですね。でも、がん患者団体支援機構さんの受講内容のほう充実しているんです。そのへんの融通性というか、全国各地に通るような、そんな制度になってくれたらすごく良いのになと思いました。2点目は、私は地元の民生委員をしています。来年は、地域の人を集めて大人のがん患者のがん教育をやりようと思っています。地元の拠点病院のがん相談支援センターの室長さんをお呼びして、病院のかかり方ということでお話ししていただくと思います。そこでピアサポートの存在を周知すれば、地域の人に広がるのかなと思いました。各地の町会や民生委員と協働すれば、一挙に広がるのではないのかな、そんなふうに思いました。

【坂下】:大変貴重なご意見をありがとうございます。地域に根付いた顔の見える関係の民生委員さんからのそういう声掛けというのは、非常に意義が高そうだと私自身も感

じました。地元の県の講義を受けないとダメだっていう話、佐々木先生これはどうなんでしょう？

【佐々木】:実はピアサポーターの研修プログラムを改定するにあたって、バウンダリーの項目は追加になったんですけど、例えばがんの知識のところとかがっさり抜いたんですね。要するに、まだピアサポートをやってないところがやりやすいようにミニマムの研修講義となっております。ですので、既にそのレベルより上の各種団体のピアサポート研修を受けている人は、もう認めることが条件ですということをおも神奈川に言っています。そちらの県はそういうことを言ってくれた人がいなかったんでしょうね。やっぱり、その担当の方の理解がまだ深くないのかなと思います。改定委員会のほうでも実は問題になっていきますので、改定委員会のほうでこの団体の研修を受けたら、もう我々のプログラムは果たしてるものとみなすというリストを、今度僕のほうで提案して作らせていただこうかなと思っております。そうすると、当然がん患者団体支援機構の講義は大丈夫ですので、それを受けてれば県のを受けなくて良いというような形にさせていただこうかなと思います。

【山田】:私は茨城県で同じように活動をしています。茨城県の場合は、そこは受け入れてもらうように私のほうからアプローチして受け入れていただいています。その他の県ではこういうことあるんだよってことを逆にお話ししていただければ嬉しいなと思います。よろしくお祈りします。

【坂下】:こういう研修を受けましたという研修内容をお見せして、事例もつけていただいて交渉していただくと、そこがまた一歩突破口になるかなと思いますので、もし朗報がありましたらご連絡ください。

【会場参加者】:順天堂大学の樋野先生ががん哲学サロンを開催されて、かなり広がってるんですね。そこで私がこれからがんの手術を受けるような人にピアサポート的なことはするのですが、一方で、樋野先生の哲学に感化されて、自分のがん患者じゃないけれどがん患者を支える活動をしたってという声を随分聞くんです。どういうふうに具体的に繋いであげたら良いのか、よろしければどなたか教えてもらえますか？

【坂下】:すみませんが、その前の段階で1個飛ばしてしまった部分があります。

先ほど民生委員を通じてという話があったので、佐々木先生それについてコメントをお願いします。

【佐々木】:民生委員の方とか、保健師さんとか、各地域にはハブになる医療・福祉に関係する方々がいらっやいます。今は在宅のほうでもがん患者さんが増えてきているので、そういったところにもピアサポーターの方が入って行って、地域包括とか地域医療計画の中にピアサポーターの活動の場を作っていく、その中に民生委員さんとの繋がりとかを作っていくというのは、非常に効果的で良いアイデ

アだだと思います。働きかけの場所としては、やはり都道府県になるのかなと思いますね。

【坂下】:先ほどのご質問は、がん哲学外来をされていらっしゃる先生のご講演をお聞きして、がん経験者じゃないけれどもがん患者さんのサポートをされたいとおっしゃってる方々の受入れということになりますかね？ピアサポートの括りからいうとちょっと外れてしまうんですけども、例えばがんの経験者のご家族であるとかで、そういう経験をより強くサポートしたいと思われてる方は、このピアサポーターにあたると思うんですが、全く経験者の家族でもないってことになってしまうと、ピアサポーターとはまた別の形になるかもしれません。団体のいろんな活動を支援するという意味での活動の場はあるのかなと思いますが、そのへんどうでしょう？

【山田】:お答えになるかわかりませんが、一応東京都は、がんの体験者とその家族という条件がピアサポーターになれるということで、他の県はがん体験者しかダメっていう県もあります。東京都は家族の方もうちのほうにはピアサポーターとして登録しております。そのへんは東京都は幅をもっているんです。

【佐々木】:私からは、その立場ではピアサポーターという形では難しいというふうに個人的には思いますね。

ただ、私が所属しているがん治療学会では、がん医療ネットワークナビゲーターっていう制度を作ってまして、相談支援の方に繋いでいく、どんな職種の方でもなれる、そういう資格になります。eラーニングを受けていただいて、シニアナビゲーターになるにはさらにコミュニケーションスキルセンターと実地見学、病院に行っているいろんな相談支援の業務を見学するという、ちょっとハードルが高くて、しかも有料なんですけれども。そういった制度で実際にピアサポーター等にも繋いだり、相談支援員の人にも繋いだりして、患者さんを支援するという形はできています。そういう活動をやっている他の支援団体もごございますので、そういった形を利用していただくのが良いのかなと思いました。



【坂下】:いろんな角度からがん患者さんを応援しようという世の中の動きが進んできて、この10年~20年ですごく勢いで増えてきてるんだなと感じます。活用していただ

けるような工夫をぜひ皆さんに伝えていけたら良いかなと改めて思いました。もう一つテーマとして、ピアサポーターに求められているスキルとか、患者さんに求められているピアサポーター像みたいなものがあると思うのですが、そのためには何が必要なのかということを考えてみたいと思います。どういうピアサポーターを今後目指していくか、皆さんとお話しできたら、共有できたらと思っております。

【佐々木】:ピアサポーターの方に必要なスキルは3つあって、1つは相談者の方のお話を聞く力、もう1つは自分の体験をそのニーズに合わせて話す・語る力、もう1つは情報収集力。先ほど会場からのご意見がありましたけど、がんの世界の情報が目まぐるしく更新されるので、それをキャッチアップして追っかけていく。情報をいかに効率良くとるかというスキルが多分ピアサポーターの方には必要です。1人だと大変なので、ネットワークで知ってる人から聞いていくっていうのが、僕は一番良いんじゃないかなと思っているのと、がんに関する情報のコンテンツを知っておく、がん情報サービスのようなところから学んでいくとか、そういうことが必要なスキルです。さらに皆さんがそれぞれお持ちの特性とか、職業に関連することとかをプラスアルファで相談者の方に披露できれば、さらに一段上のピアサポーターになれるんじゃないかなと思います。それは何かはわかりませんが。

【会場参加者】:それで言うと芸は身を助けるで、音楽好きな人に音楽を演奏するとか、絵が好きな人に絵を描くとか、植物好きな人にガーデニングをしてプレゼントするとか、そういう身近な趣味が役に立ってるんじゃないかと私は思います。

【佐々木】:まさにそういうことです。

【坂下】:私はがんサロンによく参加してるんですけど、その中でそれぞれの方が特技を持っていたり、すごく没頭してる趣味をお持ちだったりということで、そういう話がよく出ます。サロンの中では、皆さんががんであることは前提なので、がんの話もちろんあるんですけど、気持ちを上げるために、趣味とか熱中しているものとか、人間性とか生き方とか考え方とか、むしろそっちが役立ってるなと常々感じています。なので、いろんな人達が入ってきていろんなお話をされるのが、またこのがんサロンの醍醐味で、そういったところから年齢もがん種もステージも関係なく、どうやって生きていくか、病気を乗り越えて生きる、あるいは病気とともに生きるためにはどういうことが必要かってことを考える、とても良い機会になってるのかなと思います。ですので、参加されてる一人一人の良いところを引っ張り出せるようなファシリテーターになれると、よりがんサロンが有意義に皆さんのお役に立てるようなものになるんじゃないかなと思っております。ピアサポーターにとってどんなスキルが必要かについて、あまりハードルを上

げ過ぎると誰もやれなくなってしまうので、全部の情報を知るのには本当に難しいことなので、最小限のスキルをきちんと身につけることが大事だと思います。その上でもう一つプラスアルファをお願いします。

【山田】:基本的に佐々木先生が言った3つの内、聞く力と自分のことを語る力、カミングアウトできる、この2つが本当に必須条件だと思います。情報に関してはそれぞれ皆さんの立場があるので、皆さんの中で必要だな、ほしいなと思った時にはもちろん行きついていただいて良いんですけども、あくまでも必須ではないと私は思っています。ですので、最低はとにかく聞く力、自分のことをちゃんとまとめて話せるか、そのところが最低限のポイントかなと私は考えています。現在4名の研修生に支援機構では関わっていただいている、先日面接をしたんです。それぞれ思いはいっぱいあって、ただまだ自分の治療のことを話して、まだなかなか自分の中で咀嚼できてないのかなと感じられる方もいたので、そのへんは時間が解決するかなと思っています。思いだけは確実に受け止めたので、きっと立派なすごい頼もしいピアサポーターになっていただけるなと期待をしたところです。

【西巻】:私が出会ったピアサポーターさんは、もう聞く力も話す力も十分お持ちになっている方々と思っております。その中で、話すということを勘違いしないでほしいなと思うことはあります。相談者の方が求めてないのに、でもこの病気だからこれを伝えなきゃいけないというような、そういう情報のことを山田さんはおっしゃってたのかなと思うんですけども。そういうことではなく、自分が仲間として体験者としてお持ちの情報、そして相談支援センターの方達に繋げる情報はやはり持っていただくと、皆で協働できるのかなと思います。もう一つ言わせていただくとすると、さっき船橋さんがポケットを沢山持っておくのが大事だよねとおっしゃってくださった件ですが、体験をされた方のお話しなんだろうなと思います。そしてお互い連携をして、支援機構の中で繋がって、相談者に少しでも安心を与え、さらに不安をなくすような回しができた機構さんの素晴らしさに私もあの時は非常に感動しました。

【坂下】:いろんな経験をお持ちの方がいると、キャラクターとか主観もあるかもしれませんが、よりサポートが上手いくのかなと感じました。最後に一言ずつ何か皆様からの抱負でも何でも良いですけど、ありましたらお願いします。

【佐々木】:ピアサポーターの方に持って置いてほしい情報の見極め方については、インターネットの情報なんかアクセスして、それを相談者に伝えてしまうというようなことをやめてほしいという意味なんですよ。ですので、ピアサポーター同志のネットワークを作っておいて、こういうことはあの人が詳しいよねということで繋いだり、これは相

談支援の人が良いよねというような見極める力を持ってほしいという意味でした。私の職場が神奈川県ですので、神奈川県でぜひこういう活動をご支援していきたいと思っておりますので、今後ともよろしくお願いいたします。

【西巻】:私は病院に勤務しておりますので、佐々木先生がきょう何度かおっしゃってくださったように医師に周知する、医療者に周知する、そこを努めていきたいと思えました。頑張ります。ありがとうございました。

【山田】:事務局として基本的に委託事業ですので、失敗があった時には私の首が飛ぶという感じで、いつも仕事をさせていただいています。でも、ピアサポーターを守っていききたいという気持ちは、揺らいでいません。ですので、日々のシフトに入ってくださいるピアサポーターには、大変感謝しております。そのローテーションに、今 30 名の方がピアサポーターとして登録しているのですが、やはり 1 日も穴をあけるとこの事業の信頼性っていうものが損なわれてしまいますので、18 年間続いてきたこの事業を私が事務局として守っていく使命あると思っていますので、今後ともぜひ皆様の健康をまず優先に考えていただいて、ピアサポート事業に協力していただければと思っています。ありがとうございます。

【浜中】:理事長の浜中です。私自身は広島県に住んでいるのですが、この活動はほとんど東京都、横浜とか、そういったところで実施されています。私自身を振り返る時に地元の広島県ではどの程度のピアサポート活動ができるかなと思うと、まだまだです。デーモン閣下ががん検診を受けるように呼びかけて、がん検診の推進はかなりやってるんですけど。私としては、全国どこにいても誰もが同じような条件でがんの苦しみに対して相談支援を受けて、少しでもがんを乗り越える力になればと願ってるところなので、そういった全国的な地域格差に対して、(そこまで私達が責任を負う必要はないんですけども)少しでも全国的なレベルアップに対して今後どのようなことをやっていけば良いのかなと考えています。今回もアピール文で厚生労働省とか日本医師会とかにも働きかけはするんですけど、特にこの 4 年間足踏みだったので、進行していないんです。何か良いお知恵とかが佐々木先生、坂下先生とかないでしょうか？

【坂下】:非常に貴重なご意見だと思います。コロナ禍でいろんなサロンや相談支援ができにくい状況になったと思います。それで WEB に変えることによって遠隔地から参加できるようになってきたっていうメリットがあるのかなと思いましたが、なかなか WEB へのアクセスも難しい方も多かったりするという現実もあります。ただ、WEB の得意な機関や相談支援センターの誰かが WEB で中央のどこかと繋がるというような使い方をすればもしかしたら遠隔でもそういうサロンとかはできるのかなと思ったりし

ています。遠隔で WEB 開催とかトレーニングとかそういうのができていくと、もうちょっと早く広がったりしないでしょう



うかね。

【浜中】:全ての方が WEB に慣れてる人ばかりではないので、どんなふうに関わりかけしていけば良いのかなと悩むところなんですけど。

【佐々木】:先ほどの改定委員会は都道府県と面談をするんですけども、報告書に事例集がちゃんと入ってるんですね。あれを読むと、いやうちは千葉県じゃありませんからとか、もう最初からネガティブなんです。ですので、そういうところでは武蔵野日赤病院とか駒込病院の話のように、成功体験を持ってもらわないとなかなか広がっていかないというふうに思っています。浜中先生が一番動きやすそうだなというところでもまずやっていただいて、それを広めていくほうが実は上からより早いのかなと思っています。国からはやれと言われてますので、やらなくちゃいけないわけですけども、重い腰が上がらない時に下からちょっと持ち上げていただくと、動き出さないものでも動き出すような気がします。本当に一から始まることが多いです。あと、広島県内のそういう活動をしている団体のコミュニケーションが良くなることも重要で、上手くいってない県って実は委託する先が複数あってどれにしようか選べない、そういう問題もあるところがございます。ですので仲良くしていただいて、その中で支援機構の方式をやるとか、あるいはそれを簡略化したものをやるとか、実現の可能性も含めて考えていただけると、できないことはないんじゃないかなって、最近ちょっとだけ楽観しております。

【坂下】:今思いついたんですけども、例えば東京都で上手くいってる支援機構の皆さんが旅費かなんかをちゃんと県とかから出してもらって教育に行くとかして、しっかり現場に伝えに行くというかはいかがでしょうか。

【佐々木】:我々が行って研修をやってるんですけど、その都道府県ごとに手あげをしてくれないんです。なので、実はいつも改定委員会の中で、厚労省の人も入っているので、オガワ先生や若尾先生も、厚労省から言ったほうが良いですよと必ず言うんですけども、なかなか動かないので。

神奈川県が重い腰を上げたのは、患者団体からの意見だったんです。ですからぜひ患者さんとかピアサポーター側から意見を言うていただくのと、単位を都道府県とかに絞る、広島市なら広島市に絞る、尾道市なら尾道市に絞るっていう形でやっていったほうがいいと思います。まずそこから始めていくのが良いんじゃないかなと思います。

【坂下】:おそらく浜中先生がやるって言ったら進んでいくのでは。

【浜中】:そういった意味では、乳がんの患者会の活動とか、リレーフォーライフとか、そういったものも取り上げてもらったり、広島県のがん関連のホームページとか、がん対策協議会とか、そういうのはあるにはあるんですけど。なかなか患者目線では動いてないのかなとかいうところもあります。でも頑張ります。

【坂下】:本当に大変多岐にわたるテーマを皆様にお話しいただき、深く考えていただきましてありがとうございます。ピアサポート活動はこれからどんどん広がっていかねばいけないと思いますが、この意義に気付いた私達がまずは一生懸命声を大に伝えていくことが大事なんだと、改めて感じています。私が病気になったのは、もう16、7年前ですが、今も診療していますと以前の私と同じよう

に辛くて不安で先が見えないとおっしゃられてる患者さんがいらっしゃるのを見ると、やはりまだまだこの支援は必要だなと感じます。引き続きこれからそういったご病気の方のためにも良い形でピアサポートが広がっていくといいなと願っております。今日は先生方お忙しいところありがとうございました。皆様もお越しいただきまして、ありがとうございました。

【福智】:シンポジウムの皆様ありがとうございました。私は患者会をやっていると申しましたが、患者会をなさってる方はたくさんこちらにもいます。それで今日のお話を伺って、患者会とがんサロン、ピアサポーターについて、ここは同じだけどここは違うなっていうことをいろいろ考えながら聞いておりました。自分がもう本当に倒れそうになって患者会に行って、そこで元気をもらって、今度は次に倒れそうになって入ってきた人は自分を見てるといようなことがよくあるんですね。そこではとても自分も元気になるし、やっぱりこういう活動をして良かったなと思いますので、がんサバイバーになったらイコールピアサポーターにもなるんだっていうような意識を患者が持つというのはどうでしょうかね。強制しちゃいけませんけれども。本日は本当にありがとうございました。

## ■ 会場風景



## ■アピール文

### 厚生労働省へのアピール

- ピアサポート活動について以下要望いたします。
- (1)がん患者やその家族の悩みや不安を軽減するためがん体験者による相談支援(ピアサポート)が重要と考えられます。しかし実際には周知率がまだ低く、広く一般市民へ周知できるように対応を要望します。
- 2.地域格差を解消するために、全国の都道府県単位でピアサポーター養成事業に積極的に取り組むことを要望します。そのための全国共通のピアサポーター養成システムのモデル版の周知と地域に合った活用を希望します。
- 3.がん拠点病院に設置されている「相談支援センター」と「がん患者サロン」においてピアサポーターの積極的活用を希望します。
- 4.地域医療・拠点病院等のチーム医療の中にピアサポーターも加わり、がん患者支援の連携の輪の一端を担うことができるシステムづくりを希望します。
- 5.ピアサポーターの質の保持のためのフォローアップ講習への運営支援をお願いします。
- 6.コロナ禍等の困難な状況下においても、がん患者支援のピアサポート活動が中止されないような、方策に取り組む様、各地域へのご指導をお願いします。

### 日本医師会へのアピール

- ピアサポート活動について以下要望いたします。
- 1.がん患者やその家族の悩みや不安を軽減するためがん体験者による相談支援(ピアサポート)が重要と考えられます。しかし実際には周知率がまだ低く、ピアサポートの重要性を医療者へ周知できるように対応を要望します。

- 2.地域格差を解消するために、全国の都道府県単位でピアサポーター養成事業にとり組むことを要望します。そのための医療者側の支援をお願いします。
- 3.がん拠点病院に設置されている「相談支援センター」と「がん患者サロン」においてピアサポーターの活用と医療支援を希望します。
- 4.地域医療・拠点病院等のチーム医療の中にピアサポーターも加わり、がん患者支援の連携の輪の一端を担うことができるシステムづくりを希望します。
- 5.ピアサポーターの質の保持のためのフォローアップ講習への医療者としての支援をお願いします。
- 6.コロナ禍等の困難な状況の中でも、がん患者支援のピアサポート活動が中止されないことがないよう、医療者側のご支援をお願いします。

### がん患者・家族の皆さんへのアピール

日本では2人に1人ががんになり、年間約100万人の新たながん患者が発生しています。がん患者と家族のみなさん、辛いのはあなただけではありません。ピアサポート活動をご存知ですか。がん拠点病院の相談支援センターでは、がん相談会やがん患者サロンが開催されています。そこでがん体験者によるピアサポートが受けられます。電話による相談も受けられます。そこでがん体験者によるピアサポートが受けられます。その中できっと新しい希望が見つけれられると思います。どうぞコロナにも負けず、がんにも負けず皆さんが健やかな毎日を過ごすことが出来ますように願っています。

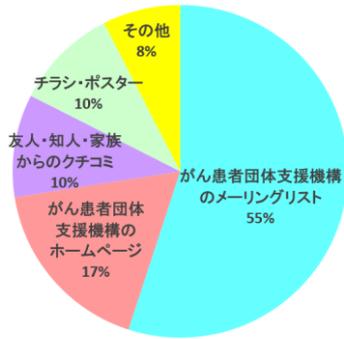
## ■第19回がん患者大集会収支報告

2023年4月1日～2023年12月1日現在 [税込] (単位:円)

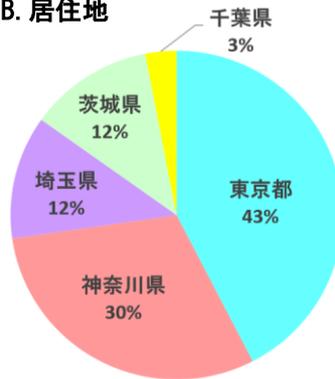
収入		支出	
科目	金額	科目	金額
協賛金	265,000	講師謝金	95,000
助成金	200,000	旅費交通費	98,140
寄附金	27,500	会議費	24,701
雑収入	50	シンポジウムテープ起こし	20,570
前年度繰越金	26,433	YouTube 配信作業	165,000
		印刷代(パンフレット等)	12,635
		通信費・荷造運賃	12,900
		その他の経費	2,163
		報告書関係(予定)	80,000
		次年度繰越	7,874
合計	518,983	合計	518,983

# ■当日アンケート結果

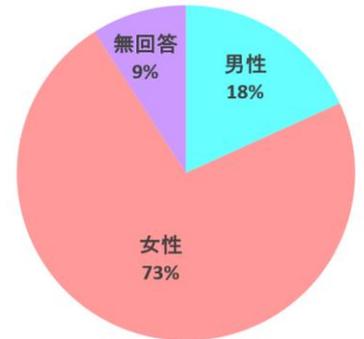
## A. 知ったきっかけは？(複数選択可)



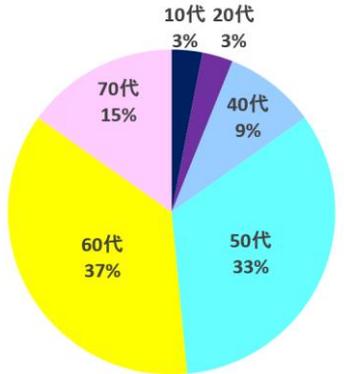
## B. 居住地



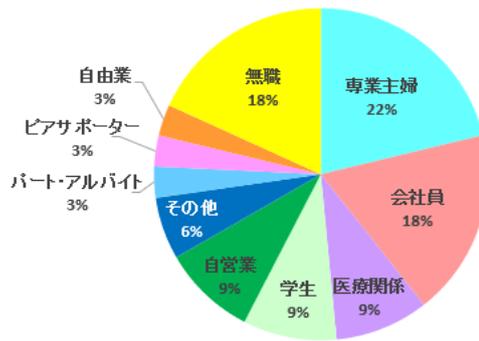
## C. 性別



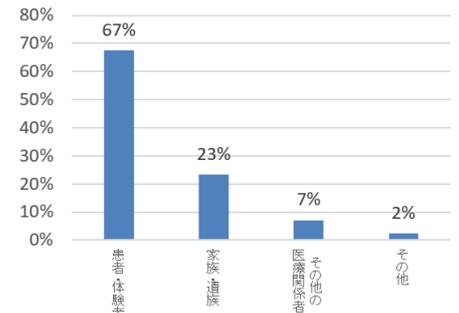
## D. 年齢



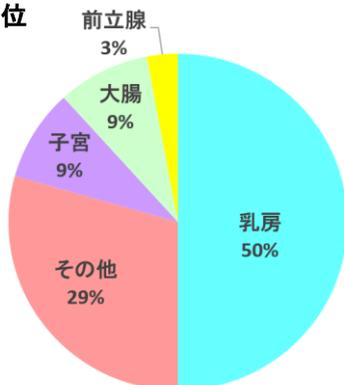
## E. 職業



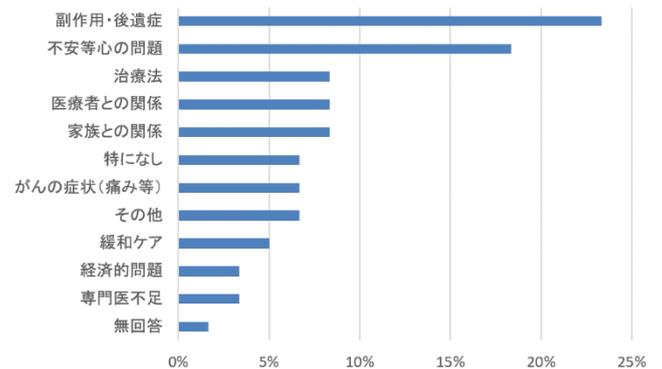
## F. 立場(複数選択可)



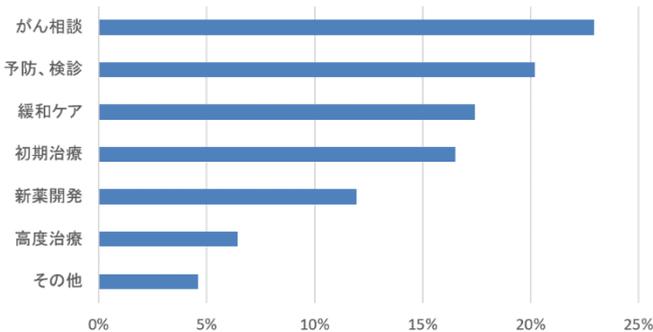
## G. 部位



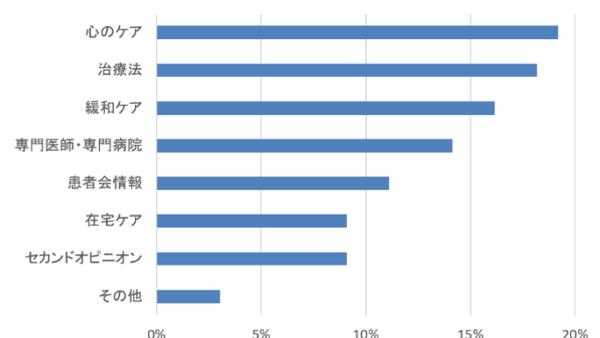
## H. 困っている事(複数選択)



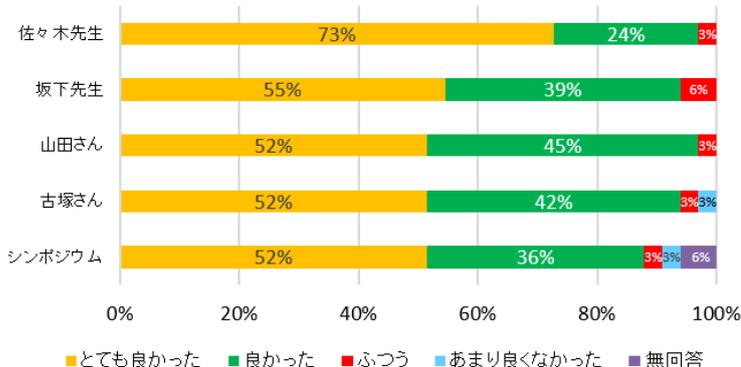
## I. 重要だと思う分野(複数選択可)



## J. どのような情報が欲しいですか？(複数選択可)



## 講演とシンポジウムについて



## ■当日の感想

### 講演の感想

#### 講演の感想(佐々木治一郎先生)

- ・諸外国の現状もお伝えいただけただけならよりよかったです、大変わかりやすくお話いただき良かったです。
- ・がん対策におけるピアサポーターの現状が理解できた
- ・がん対策推進基本計画におけるピアサポートに対する議論の変遷のご講義は、日本でどの流れがよく理解でき今後のピアサポートのあり方を検討する上で有用であると感じた。
- ・今まであまり聞くことのなかった医師の視点や行政面から見たピアサポートの現状とデータなどについて知ることができ、とても興味深く勉強になりました。
- ・ピアサポートに興味を持っている人が周りに多くいますが、ピアサポートを学ぶ機会がない。どこで研修をうけられるか探しているという声をよく聞きます。学べる場が多くあると良いと思います。
- ・内容がとてもよく理解できました
- ・現状がよくわかりました。スライドの文字が小さいところがあり見えませんでした。
- ・わかりやすい内容で良かった
- ・現状が理解でき良かったです。
- ・円グラフ等、数字のデータがあり、現状が分かりやすくて良かったです。

#### 講演の感想(坂下千瑞子先生)

- ・数年前にフォローアップ研修会で学ばせていただいた内容とさほど変わらなかった印象でした。
- ・癌サバイバーであり医療従事者でもある先生のピアサポーターへの期待は心強い
- ・ピアサポーターのほとんどがボランティア運営という現状から、基盤の整備が不十分だと結語があった。この点に関し、何かご提案等ございますか。
- ・サポーターとして、参考になりました。

#### 講演の感想(山田陽子氏)

- ・活動できる場の確保や、フォローアップ研修開催などは、事務局の強い意志とバックアップがあってこそと改めて実感した
- ・ピアサポーター養成講座の内容は吟味された質の高いものであるということが理解できた。
- ・今後ピアサポーターとして活動できるように学びを積み重ねていきたいと思います。
- ・どんな活動があるかが良くわかりました
- ・23年度の養成講座について知りたいです。信頼できる団体と思えました。ありがとうございます。
- ・具体的な話でしたが、やや説明がまわりくどい感じがしました。
- ・支援機構のサポーターとして、年間の数字だったりコロナ禍での活動も大変でしたけど、シフトに入って学んでいた実感がありました。

#### 講演の感想(古塚千紗氏)

- ・大変共感のもてる内容でした。同じことを考えておられる方がいて、心強く思いました。
- ・癌をきっかけにピアサポーターだけではなく、更に新しい資格に挑戦しキャリアチェンジされたことは素晴らしく、またピアサポーターを広めるための新たな工夫の提案など大変参考になった。
- ・AYA世代のがん罹患が増える傾向にあるため、AYA世代に

とってとても興味深い内容だと感じた。

- ・自身のがんをきっかけに人生を考えた古塚さんに力強さを感じました。感謝の気持ちを形にする行動力・決意がすばらしく素敵だなと思いました。
- ・経験からの発表でとても良く理解出来ました。人間関係の交流が大切であることを学ぶ。
- ・力強く人生を歩まれて良かったですね。青春を感じさせる若く元気なスピーチ
- ・病気の体験からの社会福祉士を目指して資格を取得された事は素晴らしいです。今後の活躍を応援したいと思います。

### シンポジウムの感想

- ・佐々木先生の「がん教育の中にピアサポーターの存在をアピールする」というお話は大変有効だと感じました。また、いろいろな方がおっしゃられていた「経験談の共有」や「手の届くところにさまざまな支援の手を」というお話は、自分自身も常日頃考えていたことなので、今後実現していけたらよいなあと感じました。
- ・私も主治医にピアサポーターの研修を始めたことなどを話しているが、挑戦そのものを喜んでいただけるが、ピアサポーターが何かについては知らないことが多く、周知については医療従事者や自治体との連携が進むことも必要と実感している。私自身も小さな周知として周りに宣伝していきたい。
- ・「ピアサポーターに情報は必須ではない」と発言なされたパネリストがいらっしゃいました。先の講演にて、ピアサポーターには3つのスキルが必要で、その中の一つに情報を活かす力というものがありました。情報リテラシー能力が欠如した者がピアサポート活動を担うことは危険が伴わないか甚だ疑問に感じました。なぜ、そのような発言をなされたのか、お考えをもっと詳しく具体的に拝聴したいと思いました。
- ・ピアサポーターの現状における課題について具体的に提示され、その解決策やすでに行われていることなどを医師や看護師の立場からみた意見だけでなく、会場の現役ピアサポーターからも活発に発言がなされとても有意義だったと思います。
- ・ピアサポート活動を周知させていく難しさは患者会活動でも日々感じています。サポートする側の積極性、病院、先生との関わり合いの大切さを考える事が出来ました。中・高でがん教育の授業をしていますが、そこでピアサポートについても話していこうと思います。
- ・途中までしか参加できませんでしたが、佐々木 Dr.坂下 Dr.のお話とても勉強になりました。北里の例をお伺いしたかったです。
- ・現状が生で伝わりました。楽しかったです。
- ・フロアから沢山の質問が出て盛り上がった。丁寧な回答で良かった。
- ・様子が見えました
- ・ピアサポーターの現状等、これからも工夫して沢山の人達にも広がっていったら良いなと思います。皆さんのご意見も聞く事ができて勉強になりました。

### アピール文・全体の感想

- ・登壇者の皆様、裏方の皆様、大変お疲れ様でした。感想ですが、ピアサポートの拡充(ピアサポーターの養成等)については、国から都道府県に協力に働きかけない限り、進まないと思いました。具体的には、国が予算をつけ、都道府県に補助を行うとともに、数値目標とその実績を国に報告させない限り、都道府県

は動かないということです。なぜなら、予算が厳しいため、ピアサポートの支援に関する予算要求が非常に難しいからです。国が強力なリーダーシップを発揮することを期待します。

- ・とても良かったです
  - ・全体は、内容的に問題点を具体的に示し、非常に良かった。佐々木先生のこれからのピアサポート事業の発展の為、ピアサポーターの人的ネットワーク作りの重要性を感じました。
  - ・がん患者を治療する病院すべてにピアサポートを置く必要性をもっと強調してほしいと思った。
  - ・東京都には拠点病院がたくさんありますので、支援機構の理事の方々に出向いていただき、支援機構のピアサポートの研修やピアサポート活動についての広報を積極的に行っていたことも重要なものではあらためて思いました。私の通う拠点病院に通う患者は、ピアサポートという言葉を全く知りません。まずは、東京都から力を注いでいただきたいです。
  - ・地域差をなくし、コロナなどで途切れることなく、必要な患者さんやご家族にピアサポーターの活動が届く環境になればと改めて感じ、アピールとして届けることは重要と感じた。
  - ・がん患者大集会なので、シンポジウムは、浜中理事長にも登壇して頂き、東京主体プラスの部分が内容構成上にあってもいいのではと思いました。
  - ・医療におけるピアサポーターとの連携をアピール文に掲載していたと思うが、具体的に何か思案はありますか。
- とても良いと思います。
- ・今後の課題について、なかなか完全な解決策を見出すことは難しいようですが、このような機会での貴重な意見を行政に提出だけで終わるのではなくぜひ問題解決につながってほしいと思いました。
  - ・ピアサポート活動についてのテーマが大変良かった。勉強になりました。医療者にももっと周知されることが必要だと思いました。そしてピアサポート活動がこれまで以上に患者さんに寄り添っていただけたらと思いました。
  - ・一歩ずつ進んで行こうという気持ちをいただきました。ありがとうございました。
  - ・勉強になることが多くありました。ありがとうございました。
  - ・とても興味深くためになる内容でした
  - ・ありがとうございました。ピアサポートがどれだけ患者のウェ

ルビーイングが上がるのか質的なエビデンスがわかりやすく患者や家族に伝わるといいですね。

- ・2019年の続きの話が聞いて理解を深めることができた。
- ・今必要な事を実感
- ・今後の方向性を示していて良いと思います
- ・これからもサポーターを続けていくうえで、勉強になった事や参考になった事を活かせるように頑張っていけたらと思います。
- ・とても力強く感じました
- ・厚生労働省へのピアサポート活動に絞ってのアピール文は、効果的だと思った。しかし、医師会に対するアピールは意味があるのか疑問を感じた。また、ピアサポート活動の現状は理解できたが、今後の展開は見えてこなかった。これからも、みんなで考えながら頑張ろう!と言うこと
- ・アピール文は、ピアサポーターとして本当に嬉しい内容でした。ピアサポーターとして患者さんや家族の方々の力になれるように私個人としてもより一層の努力をしていきたいと思いました。

#### 次回、ご希望のテーマ

- ・高額な薬剤が増えてきて、医療保険を圧迫しているとの話を聞きます。このことを踏まえた、医療経済について知りたいです。
- ・日本のがん治療の実態(現状などについて)
- ・がん患者会の現状。問題点とこれから・・・
- ・がんになったら、どんなサポートが受けられるのか。(公的なもの含む)
- ・最新の治療法や、緩和ケア、在宅について
- ・ゲノム医療について
- ・特になし
- ・ヘルスリテラシーについて
- ・緩和ケア病棟ボランティアを拡大するにはどうしたら良いか。
- ・医療者へのピアサポート事業の理解
- ・がんはもっと身近に感じていくくらいの患者数であるのに対して、どうしても距離感を感じてしまう現状において、もっと身近に感じられるようなリアルな心のうちをがん患者やその家族以外にも知ってもらえるような周知があってもよいのではと思っています。

## ■閉会の挨拶

### 浜中和子 (特定非営利活動法人がん患者団体支援機構 理事長)

皆様、長時間のご視聴本当にありがとうございました。本日は「ピアサポート活動のこれから」をテーマに講演とシンポジウムを行いました。

第一部では、佐々木先生に「日本のピアサポートの現状」について詳しくお話いただき、大変勉強になりました。ありがとうございました。坂下先生にはこれまでもピアサポーター養成講座やフォローアップ講習会で大変お世話になってきました。先生のがん体験者に対する大きな温かいお心に基づくご指導で多くのピアサポーターが育成されました。改めてここで感謝申し上げます。山田事務局長は当機構のピアサポーター育成とピアサポート活動の大黒柱です。これまでのピアサポート活動のまとめをお話していただきました。

古塚さんはご自身の体験をもとにピアサポーターとして、さらに新しいキャリアを築いて活動されています。その思いが良く伝わり感動しました。

第二部のシンポジウムでは、これからのピアサポート活動に対して、今後どのように対応していくのか討論され、全国のがん患者さんがどこに住んでも等しく、ピアサポートを中心とする支援が受けられるように、全国展開していく道筋が示唆されました。今日のシンポジウムが今後の活動の大きな力になるものと実感しました。今後も私たちはピアサポート活動やがん患者大集会等の活動を通して、がん患者さんと共に前進していきたいと思っています。皆さん、どうぞ今後ともよろしくお願いたします。今日は本当にありがとうございました。



**MDRT** The Premier Association of Financial Professionals®

**一般社団法人MDRT日本会**

1927年に発足した・Million-Dollar-Round-Table-(MDRT)・は世界70の国と地域の500社以上で活躍する、49,500名以上(2016年8月現在)の会員を有する、卓越した生命保険と金融サービスの専門家による国際的かつ独立した組織です。↓  
MDRT会員は卓越した商品知識をもち、厳しい倫理基準を満たし、優れた顧客サービスを提供しています。また、生命保険と金融サービス業界の最高水準として世界中で認知されています。←



三井住友海上あいおい生命



「がんと診断された時からの緩和ケア」の推進

がんの痛みは、適切な治療で和らげることができます。  
“痛み治療”の存在を知ってください。  
尋ねてみてください、“緩和ケア”のことを。  
私たちみんなが、がんと向き合っていくために。  
私たちは、企業団体「緩和ケア推進コンソーシアム」です。



参加企業：  
塩野義製薬株式会社、帝國製薬株式会社、ムンディファーマ株式会社

緩和ケア コンソ で検索

(2018年11月現在)

## ■主催・共催・後援・協賛・助成・寄附・制作協力

**主催：**特定非営利活動法人がん患者団体支援機構・第19回がん患者大集会実行委員会

**共催：**東京医科歯科大学病院

### 後援

厚生労働省、(公社)日本医師会、(公社)日本看護協会、(公社)日本薬剤師会、(一社)日本臨床衛生検査技師会、(一社)日本癌学会、(一社)日本癌治療学会、(一社)日本血液学会、(一社)日本サイコオンコロジー学会、日本製薬工業協会、(公財)日本対がん協会、(一社)日本医療機器産業連合会、日本死の臨床研究会、(一社)共同通信社、特定非営利活動法人日本ホスピス・在宅ケア研究会、(公社)日本臨床腫瘍学会、特定非営利活動法人楽患ねっと、特定非営利活動法人地域チーム医療推進協議会、(公財)正力厚生会、(社福)NHK 厚生文化事業団、(公社)日本臨床細胞学会細胞検査士会、特定非営利活動法人日本緩和医療学会、朝日新聞社、日本経済新聞社、読売新聞社、毎日新聞社、(一社)日本作業療法士協会

### 協賛・助成・寄附

読売光と愛の事業団、一般社団法人MDRT日本会 QOLG 賞、三井住友海上あいおい生命保険株式会社、緩和ケア推進コンソーシアム、サノフィ株式会社、アストラゼネカ株式会社、はしもとじんクリニック、医療法人宮本形成外科、医療法人花房眼科医院、

### 制作協力 (インターネット放送)

株式会社ワナファイ(深江 豊)



### 意味

人任せではなく、がん患者が自身の命のために「声を上げる」イメージを力強い片腕で表現。そしてもう片方の手は、みんなで協力し合う、つながりあう連帯感をアピールし、全体的にハートのモチーフで心の交流や人の温もりを演出しました。青と赤のツートンカラーは、男性と女性、患者と医師、患者と家族などの相互する関係、さらに静脈と動脈をイメージしています。



## 特定非営利活動法人 がん患者団体支援機構 第19回がん患者大集会実行委員会

理事長・実行委員長：浜中 和子

【東京事務局】〒154-0002 東京都世田谷区下馬5丁目28番7号  
TEL:03-5787-6411 FAX:03-5787-6420 Mail: info@canps.jp

【尾道事務局】〒722-0022 広島県尾道市栗原町5901-1 浜中皮ふ科クリニック内  
TEL:0848-24-2413 FAX:0848-24-2423 Mail: hmnkk@do8.enjoy.ne.jp

URL:<http://www.canps.jp>